

第問 つぎの文章の主人公、四条大納言藤原公任は、山城国愛宕郡の長谷の山荘に住んでいる。これを読んで、あとの問いに答えよ。

かくて奥山の御すまひも本意あり、心のどかにおぼされて、年も暮れぬれば、一夜がほどに変わりぬる峰の霞もあはれに御覽ぜられて、「^(注1)山里いかで春を知らまし」などうちながめさせ給ふに、ついたちの日も暮れて、二日辰の時ばかり、^(注2)弁の君参り給へり。思ひかけぬほどのことかなとおぼさるるに、御装束持たせ給へりける、隠れの方よりうるはしうして、御前に出でて拝し奉り給ふなりけり。^(イ)人なかの折の御すまひだに、なほわが御心にはすぐれて見えおぼさるる御有様の、まいてさる山の長谷のほとりにては、光るやうに見え給ふに、^Aあないみじ。これを人に見せばやと、見るかひあり、めでたのただ今の有様やと、人の子にて見むに羨ましくも持たらまほしかるべき子なりや、みめ・かたち・心ばせ・身の才いかでありけんと、あはれにいみじう^Bおぼさるるにも、御涙浮かびぬ。さて山里の^(ロ)御あるじ、ところに従ひをかしきさまにて、御供の人にもおほん御酒給ひて、帰り給ふ名残恋しくながめやられ給ふ。かくてついたち四日のつとめて、^(注3)御堂に、^(注4)三井の別当僧都尋ねに御消息^(a)ものせさせ給へば、^(b)参り給へり。さて心のどかに御物語などありて、^(ハ)御本意のこと聞こえ給へば、僧都うち泣きて、御髪おろし給ひつ。戒など授け奉り給ひぬ。かくて帰り給ひぬれば、世にやがてもり聞こえぬ。これを^(c)聞こしめして、御堂より御装束一領して参らせ給ふとて、

(甲) いにしへは思ひかけきやとり交はしかく着むものと法の衣を御返し、長谷より、

(乙) おくれじと契り交はして着るべきを君が衣にたちおくれけるとぞ聞こえさせ給ひける。

『栄花物語』による)

(注1) 山里いかで春を知らまし || 「鶯の声なかりせば雪消えぬ山里いかで春を知らまし」『拾遺集』

春) (注2) 弁の君 || 左大弁藤原定頼。公任の子息。 (注3) 御堂 || 御堂関白藤原道長。

(注4) 三井の別当僧都 || 三井寺の別当、心誉僧都。

問一 段落を接続する表現に注意しながら、右の文章を三つの段落に分けるとすればどこで切れるか。第二・第三段落の冒頭の七字を抜き出して示せ。

問二 傍線部 a 「ものせさせ給へば」・ b 「参り給へり」・ c 「聞こしめして」の主語を、次の中から選んで番号で記せ。

1 公任 2 世の人 3 弁の君 4 御供の人 5 僧都 6 御堂

問三 二重傍線部イ・ロ・ハについて、次の問いに答えよ。

イ 「人なかの折の御すまひ」に相對する表現を二つ文中から抜き出して示せ。

ロ 「御あるじ」とはだれがどうすることか、簡潔に説明せよ。

ハ 「御本意」とはどんなことを指すか、簡潔に説明せよ。

問四 波線部 A・B について次の問いに答えよ。

A 「あないみじ、これを人に見せばや」を、「これ」の指す内容を明らかにして、わかりやすく現代語訳せよ。

B 「おぼさるる」は三つの内容を受けているが、それぞれの部分を初めと終わりの二字ずつで示せ。

問五 文中の和歌について次の問いに答えよ。

1 (甲) の歌を解釈するために、第一・二句を A、第三・四句を B、第五句を C として、わかりやすく散文的に書き改めるとすれば、その順序はどうなるか、符号で記せ。

2 (乙) の歌の修辭法についての次の説明文の空欄に、漢字を一字ずつ入れて完成せよ。
「たち」は「a」と「b」との c 詞で、「d」の e 語となっている。

問六 弁の君を迎えた公任の心情を四〇字程度で説明せよ。